

O C U A C

大阪市立大学山岳会会報 No.55

2012.12.20

～ 廣谷光一郎さんを偲ぶ ～



ダウラギリ・トレッキング (2012 年 10 月)



ダウラギリ主峰(8,172m)



ダンプスピーク(6,012m)



ニルギリ連峰



ダルバンの子供たち

源治郎尾根 24 時間 (2012 年 8 月)



灌木帯を抜けて



峰頂上リッジ

目次

故廣谷光一郎君へ	馬野 庄二	・・・	1
廣谷光一郎を思う	荻野 昌宏	・・・	2
廣谷さんを偲ぶ	橋本 信行	・・・	4
廣谷さん追悼文	常慶 和久	・・・	8
廣谷光一郎さん	小笹 孝	・・・	9
仙丈岳から農鳥岳へ	伴 明	・・・	11
源次郎尾根 24 時間	兵頭 渉	・・・	15
トレールラン	片岡 泰彦	・・・	17
ダウラギリトッキング報告	福山 昇二	・・・	19
ダウラギリトレッキング雑感	藤村 達夫	・・・	23
ダウラギリトレッキング風物誌	島川 勝	・・・	25
ナヤカンガ遠征を終えて	(博多駅前山岳会) 山本 政之	・・・	28
ヨーロッパ三カ国 ハイキング	上田 忠志	・・・	30
90 周年記念誌	山田 裕敏	・・・	34

故廣谷光一郎君へ

旧姓 田倉 庄二

2年後輩の廣谷君は高校山岳部からの山歴を持ち、登山では私の先輩であり、特に岩登りの感性と身のこなしは抜群で、私は彼を手本にし目標として岩登りの練習に励んだものであった。彼との山行で忘れられないのは1953年3月28日小窓の雪洞で猛吹雪に苦しんだ後の劔岳登頂と翌年夏山奥又白合宿での前穂四峰である。7月21日、先導廣谷君（地下足袋）後続田倉（トリコニー鋏靴）での明大ルート、2日後の23日田倉と廣谷君（共に地下足袋）で入江・新村ルートの青白きオーバーハングを乗り切った時の満足感は何年経っても忘れ難く、ヒュッテ雪線や又ランタンリルン50回忌の時のカトマンズのゲストハウス等でも2人ともよく沢山の酒を飲みながら囲碁を楽しみながら、昔の山を振り返りなつかしく楽しく語り合ったものです。

貴兄は卒業後東京で薬品会社を経営されてからも、リルン一次隊に続いて後続のヒマラヤ遠征の指導準備に当られ山岳会々長として山岳会を立派にリードされ、又日本山岳会ではエヴェレストに挑む等広く日本山岳界に貢献され、立派な山歴を刻まれました。

私より先に病魔に侵され、先立たれたのは誠に残念である。

仏教で云う死後の世界、来世が若しあるのなら、来世でまた雪山や岩山と一緒に登ろうではないか、待っていてくれ、それまで健康に留意しお互いに酒を少し控え目にして身体を鍛えておきたいもんだ、と願っている。

廣谷光一郎を思う

荻野 昌宏

アタックテントから顔を出してあたりをキョロキョロ二人で顔を合わせてニタリ。登山道の上に寝ていた。目の前には仙人池に逆さに影を写した裏剣が鋭い岩稜を見せていた。

剣真砂沢合宿の帰途彼(廣谷光一郎)と二人で阿曾原迄歩いた合宿締めくくりの縦走。

彼は六甲育ち、結構詳しく二人で歩き廻った様子を想い浮かべながら書いてゆきたいと思う。岩登り技術についてはベテランの域で色々と基本的面等新人教育係だった。他、山の道具に関しても色々本をさがしてテントの改良、冬山用床マットの試作と楽しみながら作ったのが多い。

さて彼の初めての夏の合宿は穂高涸沢だった。二人で前穂高のAフェースのアタック、前穂高の横合から三ピッチ程降りAフェース下部から登り始めた。なかなかスマートに見えた。帰りは三四の科尔からグリセードでテントに向かって一直線。見上げると二人のシュプールのがきれいに残っていた。

鈴鹿での合宿は藤内壁の岩登りを楽しんだ。手足の使い方は見本になることが多いにあり。森本先輩が来ておられ感心されたのを思い出す。

冬山合宿の下見と涸沢から穂高小舎にはいったのが12月の初めで小舎全体がカチカチの感じでシラフも寒かった。フト窓下に鳥が横たわっているのが見え持ち帰り二人で焼いて喰べて了まったこと。九州大学の学生との出会いばしの談話がはずむ。

二度目の涸沢合宿は長雨に見舞れ、白馬岳迄の縦走のみとなった。途中の槍の肩で野兔を追いかけたり、小槍に登ったりし鷺羽の池で一日ゆっくり休憩し雷鳥の雛を捕まえて親

鳥につつかれての大騒ぎ、難を返してやる。楽しみながらの縦走も彼が上手に新人を強弱をつけながら引率見事でした。

最後の冬山及び春山として西穂から奥穂の ATTACK 計画完登も彼の動行誘導のおかげと今もはっきりと思い出に残る。今は遠くへいってしまった彼のことをより多く思い出そうと努めているところ。彼を偲びたいと思う。



荻野氏より提供戴いた、廣谷さん直筆スケッチ、北穂高南陵テラスから涸沢・前穂高。
右上に“1951-7-26 広谷”と署名。

廣谷さんを偲ぶ

橋本信行

廣谷さんは不死身の男だと思っていました。今まで何度も入退院を繰り返し病氣と闘ってきたが、必ず元気になりそれまで以上に活発に活動されてきました。今度も入院されたことを聞いたが必ず以前のように元気な顔を見せてくれるものと信じていました。突然の訃報はとても信じられなく、5ヶ月たった今でも、いつものように、こんな計画を立てたから一緒に行こうと電話がかかってくるような気がしています。

私と家内にとっては1952年4月に山岳部へはいったときからのお付き合いだから、60年になります。この間海外、国外であちらこちらに一緒に登山や旅行をさせていただきました。

今回この追悼文を書くためにどんな山と一緒に登ったのか記憶をたどりましたが現役のころの登山は何も思い出せませんでした。つまりところ二人とも身が軽く岩登りが得意だったため何も記憶に残るようなことが起こらず平凡な登山だったのではないかと考えています。

それでは年代順別に私の記憶に残っている思い出を辿りたいとおもいます。(ゴチックは廣谷さんが事故や病氣に会われた年です。)

1961年は当山岳会にとっても忘れられないランタンリルンの遭難が起こった年でした。同年5月11日午前4時45分に第3キャンプにいた全員が雪崩に巻き込まれ“だんだん呼吸が苦しくなり始めた。いろいろな事が夢を見るように脳裏にちらつく。——急に顔面にかたい物体がバラバラと落ち、ポツカリと空が見えた。近藤隊員が見下ろしている。”(注1)

この後、恐怖のあまり錯乱状態になっている隊員やシェルパをつれて、2000mのアイスホールを下ったことは廣谷さんの強靱な精神力を示していると思います。また、医学博士として事態を客観的にみることのできる日ごろの鍛錬を示しているものだと思います。同時にまた、ご自分の運の強さにも自信を持たれたことと思います。それがこの後の病魔との厳しい戦いにも勝ちぬかれた大きな武器となったのではないのでしょうか。

この事件の後、1969年にはJACエレベスト遠征、1970年にはJACの代表として韓国訪問、1973年にはJACのメンバーとウルムチ探検をされています。

1991年は病魔との過酷な戦いの始まりの年になりました。食道に癌が見つかり、手術は16時間にもおよびました。手術後、“麻酔が切れ、身動きができない状態の中で、人工的に呼吸をさせられている時、そのつらさ、その痛さ、生きることのつらさの強制は、麻酔から戻らなかったほうが良かったと思うほどのものであった。”(注2)

1999年には廣谷さんの山仲間に私も入れていただいてパキスタンから中国国境のクンブラジュ峠までの旅をさせていただきました。廣谷さんは大手術の後は胃と食道

を直結する方法をとったため通常の人のように食べたものを留めておくスペースがありませんでした。1回の食事でとれる固形食物はにぎりずし1—2ケぐらいでしかもそれだけとると30分ぐらい休まないといけませんでした。カロリーの補給はもっぱらアルコールでそれもビールが主体でしたが、旅行の場合はかさばるのでシーバスリーガルの12年物を持って歩いておられました。

パキスタンへ行く時は同国が禁酒国なのでアルコールの持ち込みができず大問題でした。しかし同氏のカラコルムへの情熱はそれを上回り奇抜な方法でアルコールを持ち込むことに成功しました。ミネラルウォーターをひと箱全部中身を捨て、代わりにホワイトリカーを詰め栓を接着材でひっつけてしまいました。当時はまだ液体の機内持ち込みができたので、まんまとパキスタンの税関を通り抜けることができました。私も見つかったら没収覚悟でスーツケースに紙パック入りのお酒を沢山詰め込んで食料確保に協力しました。

それでも、奥地のフンザあたりまで行くと足りなくなり心配でしたが、廣谷さんは現地の人に密造酒の調達方法を聞き出し、手に入れてきました。

この旅では、途中でナンガパルバットがよく見えて感激されていました。このことが廣谷さんにとってカラコルム山群特にK2のそばまで行きたいという思いを植え付けたのではないかと考えています。

1998年食道癌の手術した部分が吊り上げているためだんだん狭くなるので1年に何回かカテーテルを入れ広げることが必要ですがそれに失敗し患部から細菌が入り入院、同年この部分を切除し再縫合、1999年吊り上げられた胃の部分を再手術、2001年S状結腸切除手術、2002年舌癌が発見され切除と毎年のように病魔と闘ってこられました。

しかし、これに怯むことなく2000年には前回パキスタンと中国の国境が通れなくなっていたため今度は新疆ウイグルからクンブラジュ峠に登るためにシルクロードの旅にご一緒させていただきました。私にとっては前年のパキスタンの旅ではガンダーラ地方の多くの仏教遺跡を見ることができ、またシルクロードの旅でも多くの仏教遺跡を見ることができ、その土地ごとの人と仏教のかかわり合いが具体的に見られたことが大きな収穫でした。

2002年には2月に舌癌の手術の後にも拘わらず元気でブータンの山を見に行こうと誘われお伴しました。その頃はまだ鎖国の名残でまだ訪れる人も少ない時期でしたが、それだけに昔の日本はこんな国だったのではないかと思わせる懐かしい旅をさせていただきました。人々は清潔で礼儀正しく、特に子供の物をねだる姿は見たことがなく廣谷さんも感心していました。途中ツエチュというお祭りに出会ったが、500畳はある大きな掛物に額を当てお願いをすると生まれてから現在まで行った悪事がすべて許されるという行事があり廣谷さんもそれを行い大変喜んでおられました。丁度その日が還暦の誕生日であり、長年の病魔との闘いに屈折することもあった気持ちが一気に吹き

飛んだという感じであったのではないのでしょうか。

2003年には念願であったランタンリルの墓参に出かけることができました。遭難の後43年たって始めて現地を訪れることができて、さぞかしほっとされたことでしょう。この時は大島健司のお姉さんと家内も同行したが5000メートルの高所で1泊したところ二人とも高山病にかかり、持参した酸素でやっと下山したことが印象に残っています。しかしこんな環境で肉体的ハンデイがあるにもかかわらず廣谷さんはお元気で高所での適応能力は天賦のものではないかと感じました。

2005年には中国のヒマラヤの一部であるミネアコンガを見に行きたいとのことでお伴しました。ここは1982年に日本隊が遭難したがたった一人だけ松田宏也氏が19日間山中を徘徊し奇跡的に現地の人に発見され救助されました。同氏は奥田さんの会社に勤めて居られる由。

2005年3月にミネアコンガから帰られてわずか3ヶ月後の7月に念願のカラコルムのK2を見にJACの長尾先生と二人で旅立たれたが途中の機内で突然左の上肢、下肢に強い麻痺と硬直が起こり、北京空港で給油のため着陸したのが幸いして、急遽長尾先生が脳梗塞の疑いがあると診断され病院まで同行され入院できたとのことでした。幸い日本の援助で建てられた日中友好病院が医師、設備が揃っており事後の経過もよく10日ぐらい北京で過ごし帰国されました。この時のことを「機中でなんの前触れもなく左手足の麻痺硬直が発症した時の心境は、半身不随、言語障害 e t c で、死というより今後の社会生活について、もう駄目と思う絶望感であった。」(注3)とのべておられます。

廣谷さんは手術後ゴルフやスポーツができないため、碁が一番の趣味になりました。一緒に旅をするときは必ず携帯碁盤を持参して、機中、空港待合室、山小屋、ホテルなどで時間があれば碁を打っていました。また市大理工学部で東京在住の仲間を集めて情報交換や親睦の会を作られていましたが、この10年間ぐらいはその人々はほとんどリタイアされたので、碁を打つ会だけが残り毎年夏に富士山の麓で泊まりがけで出かけていました。私もこの会に入れていただき毎年参加させて頂いておりました。時には奥様同伴の機会も作られたので、富士山麓、有馬温泉、熱海などに家内とともに参加させて頂きました。また私がハンガリーに駐在している時夫婦で遊びに来られ、ウィーンであちこちご案内したことを思い出します。

廣谷さんはいつも旅先でどんなに時間がない時でも、50枚から100枚絵葉書を書いて取引先や友人などに出されておりました。これで苦勞されたことが2度ありました。1度目はウィーンのヒルトンに泊まれたときにフロントのクラークに切手代を着服され葉書は日本に着かず、2度目はカトマンズの宮原さんのホテルに泊まった時同じことがおこりました。この時は宮原さんが調べてクラークから葉書を取り戻して、ホテルのお詫び状をつけて出したので無事着いたとのことでした。

廣谷さんは友達に対する思いやりの気持ちが深く、私が前立腺癌で手術をすることが

分かると新聞の切り抜きやいろいろな情報を送ってくれました。また他の友人たちにも薬や医療面でのサポートをされていました。稲垣さんという芦屋高校山岳部からの友人がおられ、ネパール、パキスタン、中国、ブータンなど私もご一緒させて頂いたのですが、病気で亡くなられた後も、奥様を我々の夫婦での旅行に誘われておられました。2010年5月のランタンリルン遭難50周年のお墓参りは2003年のお墓参りとは違った気持ちを、廣谷さんに起こさせたように思います。ご自分は体力的に現地へは行けない身体と承知していても眼前のリルンをヘリコプターから見たときに会長としてランタンリルンプロジェクトを是非成功させるのが自分の役割ではないかと考えられたのではないかとおもいます。

それは次のように述べられているからです。“——50年年目の追悼会が営まれた。隊員として同じ雪崩に巻き込まれた私としてはこれへの参加により一つの時代の区切りが付けられると考えていた。然しながらこの1961年の遠征隊の出発までにはそれを遡る40年間の当会の歩みがあつてのことである点に思いを巡らせるとき、その90年誌の刊行が次の課題として顕れてきた。”(注4)

これから会長としてプロジェクトの推進を少しでも進めたいと思われていた時に突然病魔がまた襲いかかりさぞかし無念であつたであろうと大変残念におもいます。

今年から東北大震災で無念にも亡くなられた方々の供養を目的に家内と始めた四国88ヶ所のお遍路でしたが、6月に廣谷さんが亡くなられ、8月に池永さんが亡くなられこの頃はお二人を回向する旅になってしまいました。私にとって、山を通じて知り合えた大島健司、廣谷さん、池永さんは掛けがえのない方々でした。そして今でも私の心の中に生きており、時々昔の楽しかったことや苦しかったことを話しております。廣谷さん、あの世でまたお会いできるのを楽しみにしております。ゆっくりとお休みください。有難うございました。

合掌

注1 山岳会ブログ コラム ”実体験 左半身麻痺硬直

注2 同

注3 同

注4 雪線 創立90年抄史 11ページ

影の恩人

常慶和久

42 年前の今日、11 月 7 日。カンジロバ初登頂に成功した。メンバー 7 名のうち今では既に 3 名（佐藤、諏訪、後藤）が黄泉の国へ逝ってしまった。平均年齢 24 歳と云う若い隊には準備段階から苦難の連続で、幾多の大きな壁に何度か挫折しそうだったが、目に見えない何かに導かれるように、成功を掌にすることが出来た。

その何かの一つが 廣谷光一郎さんの存在であった。当時、海外遠征には日本山岳協会の推薦が必要であった。大阪山の会をはじめ何隊かカンジロバを目指しており、佐藤と後藤は急いで申請書を作成し、機関決定を経ずに J A C 常務理事の廣谷さんに相談。親交のある丹部節雄・日山協常務理事（海外登山担当）・慶応大山岳部 O B に折衝・差配して下さり結果的にネパール政府から翌年 70 年秋の登山許可を取得。その新聞報道が山岳会総会当日の朝であり総会（小生は欠席）は騒然とし佐藤は泉さんの逆鱗に触れたものの後日の臨時総会で遠征隊派遣が了承された。初登頂成功後、ネパール登山局長から念書（ランタンリルン解禁後 O C U A C に優先権を与える）を取り付け帰国した。

丹部さんは毎年ネパール政府と情報交換のためカトマンズを訪ねられていた。ある日、丹部さんから小生宅に電話があった。「昨日、登山局長に会ったとき O C U A C の M r jokei にランタンリルン解禁されれば優先的に O C U A C に許可すると伝えてほしいとのことでした」と。丹部さんの親切な丁寧な計らいに大変嬉しかった。この事は廣谷さんと丹部さんが如何に熱い友情で結ばれていたかの証左であり、このような先輩を持てたことの誇りと至福の極みを感じたひと時だった。また、先の念書が空念仏でなく、ランタンリルンへの望みが大きく膨らんだのだった。

泉隆次郎追悼集と雪線・創立 90 年抄史（交友録）に述べられている様に、ランタンリルン遭難事後処理が一段落して、泉さんは東京在住の廣谷さんに J A C の雑用をしっかりとるように指示された。廣谷さんは献身的な努力をされ、11 年に亘り理事の要職に就かれた。常務理事として松方三郎会長を補佐して日本山岳協会の設立にも寄与された。その働きは

70 プレ日本エベレスト登山隊に全国の並み居る岳人の中から推挙されたことでもわかる。そして影の力として隊員の気持ちの結集に腐心され混成隊の難しさをよく克服され偉業を成し遂げられたのだ。その年のポストに初の日ネ合同遠征隊としてカンジロバ 初登頂に成功した。八王寺で開かれた J A C 報告会で報告を終えて降壇してくる小生に松方会長が歩み寄られ「素晴らしい遠征」との賛辞を頂いた。日を置いて第 10 回山溪登攀賞を受賞した。これらのイベントのあと喜びを伝えたく中野のお宅をお訪ねしては歓待を受けたことが昨日のことのよう思い出される。廣谷さんの嘗々と築かれた人脈があったればこそカンジロバ登頂への第一関門を突破できた云える。正しくカンジロバ成功の影の恩人であった。

廣谷光一郎さん

小笹 孝

前会長廣谷光一郎様、謹んで心からご冥福をお祈り申し上げます。

肥満とは終身無縁の白皙のインテリジェント溢れる風貌からはどこのそのような力を秘めてられていたのか不可思議とも思えるタフネス振りで永いこと病魔とたたかわれ、何回も死線を超えてこられました。

廣谷さんの生前のご交遊が広く且つ深かったのと同様に病気とも実に広く深くお付き合いをされてきたと思います。

ガンとの長い戦いの他にも旅先での突然の発症にも拘らず、同行者のなかに医師がおられた幸運があったというものの、黄泉の国からも嫌われたモンスターとの印象が強烈です。

廣谷さんに初めてお目にかかったのは山岳部に入って1年生の夏山・涸沢合宿でした。

《そろそろ着かれる廣谷先輩をちょっと下に降って出迎えて来い》、とのMリーダーのご指示に今の涸沢ヒュッテから一段降った岩角に腰掛けて、お会いしたことの無い先輩が判るだろうかと不安な気持ちで待っていました。

心不安げな痩せっぽちが人待ち顔に座っていると声を掛けられて、当の先輩だと分かり大いに安心したことを鮮やかに覚えています。

廣谷先輩が理工学部ご出身であることが親しみを覚える発端でした。

市大山岳部は商大山岳部の影響を大きく受けていますから、Y会にあらねば人

にあらず的雰囲気の時には漂わせる大先輩もいらっしゃるのだなーという思いを、僻み根性も手伝って密かに感じることもありましたが、廣谷さんへの敬愛の念を加速させていきました。

私は山岳部現役時代はアンチヒマラヤでしたが、同じ思いであった浅井 工が「食わず嫌いもいけないからちょっと覗いてくる」と言って2次隊に参加するべく準備中に横死したことから自分も覗きに行ってみたいと思うようになり、数名が定期的に集まって「研究会」をささやかに続けていた時期は丁度中印国境問題に端を発してのヒマラヤ登山禁止期間中でした。

当時JAC 理事の要職にあった廣谷さんに解禁情報をせっついては、帰省されている芦屋のお宅にまでお邪魔していろいろとお世話になりました。

囲碁もよく打って頂きました。

年次総会の終わったあと、いつも総会会場のホテルでお泊りになる廣谷先輩の部屋に押しかけては半夜もしくは徹夜で、H 先輩や O ちゃん、K、F、S ちゃんの強豪に揉まれての春宵一刻、楽しみが尽きませんでした。

会報54号の表紙を飾る、雪線で対局中の先輩のお写真が、我々山岳会の後輩たちに見せてくださっていた晩年の先輩のお姿を余すところなく正確に伝えていると思います。

実に頼りない私ではございますが誠心誠意努めたく存じます。

何卒お守り戴きたく、お願い申し上げます。

仙丈岳から農鳥岳へ、 2012年 夏山

伴 明

7月28日 晴れ

「雪線」庭の草刈りも、今年は先に来ていた大堀さん藤木さんが早々と刈り取ってしまい、高速バスで駒ヶ根インターで降り光前寺境内を突っ切って「雪線」に着いたら、庭の草はきれいさっぱり無くなっていた。

“こぶしの湯”で汗を流したあと、中嶋、丸子、山田、兵頭、伴と京大山岳部OBの秋田さんでビールとスキヤキを始める。 誰かの差し入れた“七笑”はすこし甘く感じた。夜遅く京大の他3名が着き一緒に遅くまで宴会が続いた。

7月29日 晴れ

丸子さんに戸台口バスターミナルまで送ってもらい、8時のバスで北沢峠へ。8時50分峠から仙丈へ登りはじめ、途中の大滝の頭から右側へ大きくトラバースして、馬の背ヒュッテあたりで大平小屋からの藪沢コースと合う。

このルートは途中で水がいくらもあるし、峠からの尾根コースより楽だ。

夏山最盛期の今登山者は多いが、富士山のようなことはなく、山ガールも少なく中高年の人が多い。 2年前に右側の仙丈東面三軒岩小屋沢を兵頭さんと登ったことを思い出しながら、頂上よりすこし下のカールにある仙丈小屋に着く。 小屋下の水場で水1L入れる。 この小屋はこのあたりただ1軒の独占企業で立派な別荘風建築、屋根にはソーラーパネル、周囲に8本の風力発電用プロペラが設置されているが風が無いので回っていない。 南アルプス国立公園の仙丈岳東面でのもっとも美しい環境を独り占めしている。 まあそれはいいが、小屋の前にあったテント指定地がなくなっており、まわりの登山道のあちこちに「この山域で北沢峠以外テント張ること禁ずる」との立て看板あり。このあたりでテントを張ること禁じられ、テント指定地もなくなったら、テントで寝るつもりの私はどうすりゃいいの・・・

午後1時仙丈岳3033mの頂上からの眺めがすばらしい。 高曇りだが降りそうも無く、風も無く人も通っていない馬鹿尾根、仙塩尾根に入る。 馬鹿尾根とは仙丈と塩見の間のながーい尾根、バカどころか南アルプス中心部を南北に走る山稜と森林の連なる夏のパラダイスコース。 53年前(1959年)山岳部の夏山剣合宿のあと南ア縦走の途中に通過、翌春澤田秀清リーダー、伴、吉住、明石、岡本、吉田で甲斐駒から聖岳までの縦走の途中に通過した。夏はただただ暑くてしんどかったこと、春は雪がブカブカで膝上までもぐり歩くのに難渋したことしか覚えていない。

仙丈の頂上から尾根に入るとたん誰も行きかう人がいない。仙丈の頂上まで道沿いに張ってあったロープもなくなり、大仙丈岳への下り気味の岩稜砂礫の縦走路のわきには、白くて小さなイワツメクサ、黄色のタカネスミレ、ピンクのシオガマ類が40cm四方の群落をとこところに作って可憐に咲いている。岩、砂礫、コケ類とその間に咲く小さな高山植物の取り合わせが、みごとに箱庭的というか、日本の昔からの庭園の原型をなしているように見える。銀閣寺の銀沙灘の庭、竜安寺の枯山水、詩仙堂、毛越寺の回遊庭園などをミックスしたような光景が、雲上の山稜に展開されており、中世の作庭家達の美意識にはこれらの山稜の原風景が通奏低音のように響いていたのではと思わせる。

大仙丈岳2975mからは下り一方となり、高度2600mあたりで濃緑の這松帯は岳樺帯に移っていき、やがてツガなどの針葉樹林帯へ降りていく。途中で出会ったのは、北岳間ノ岳三峰岳をまわってきた中年男女組と、三峰岳の南の熊の平から10時間歩いてきた中年夫婦のみであった。緑緑した日本庭園ふう樹林帯を通りふきの平を抜けて、樹林の中の伊那荒倉岳2517m標識のそばにテントを張る。パンとレトルトカレーで夕食をすまし、天地まったき静けさの中でこのまま朝になっても眼が覚めなくてもいいかななんて思いながら熟睡する。

7月30日 晴れたり曇ったり

朝5時半朝露に濡れたテントをたたんで出発。20分ほど進んだあたりに水の枯れた高望池があり、池から50mほど伊那側に下った所に細い水流があって水を1.5L汲む。40分でこの尾根の最低鞍部、野呂川越え2300mに着いて一息入れていると2人の青年が追いついてきた。私のザックは約11KGだが、彼らの荷物はずっと少ないのでテントを持たずに縦走しているのと聞いたら、イエス、ビバークです、これから両俣小屋経由北岳まで行く、昨晚は伊那荒倉のすこし大仙丈よりでビバークしたと。創価大学生というので、大学に山岳部はあるの？ ハイあります、山岳部には入らないの？ イヤーめんどくさいです、山登りは好きだが山岳部に入って半強制的に山行させられるのはいやです、好きな時に好きな人と山登りするのが良いですと。

学生達と別れ三峰岳への稜線を進む。これまでより倒木が登山路を塞ぐ回数は増えたが何ほどのこともなく、樹林帯を過ぎ這松帯をじょじょに登って岩場の多い岩稜帯に出る。このあたりも大仙丈岳周辺と同じように何とも心休まるおだやかな箱庭的日本庭園ふうの山稜で、高曇りだがさわやかな大気のなかを一人ゆっくり登る。1~2箇所クサリ場を過ぎて三峰岳2999mの頂上に着いた。頂上には25cm角高さ1mの木製（基礎は鉄板）でまことにがっしりした標識が立っている。標識には「この付近の大井川源流域は、

特殊東海製紙の社有林です、社有林の豊かな自然を守るため機密な基準を設け森林管理を行っている、入山者のご協力をお願いします。東海パルプ社有林」とある。 エーッ、この頂上は南ア国立公園すなわち国有地ではないのか？ 一企業が麗々しくここは社有林でございとこんな標識立てていいのか？ 北や中央アルプスの山の頂上では見たこともないがとの疑念を抱きつつ、南下する馬鹿尾根と別れ間ノ岳へと東進する。 不意に100mぐらいの岩峰が稜線上に現れ直登するのかなと思ったら、右側に楽な捲き道がついておりそれを登って午後2時、間ノ岳頂上3189mに着いた。 誰もいない。 16年前(1996年)の9月、佐藤、山田、伴で夜叉神峠側から野呂川を渡って「細沢」を登り、間ノ岳から北岳大樺沢経由広河原へ降りたとき以来だ。 三峰岳頂上と同じく東海パルプ社有林の標識が立っていた。 だっ広い山頂の南側の残雪わきにテントを張れる場所あり、泊まりたかったが、まだ早すぎるので農鳥小屋まで降りることにする。 小屋への縦走路にはチシマギキョウの小さな群落がいたところに咲いており、他の高山植物は少なくて一点豪華主義、とても品が良い。 幅の広い二重山稜がゆるやかに連なっている間ノ岳と西農鳥岳のあいだの鞍部2800mに、これまた仙丈小屋に劣らず明るくて広々した小高い場所を独り占めして5棟の赤い屋根が並んでいる。 小屋の主人とおぼしき男が大きな声で「今日はこの小屋にお泊りですか」と話かけてきた。

「まあ、テント指定地でテント張ります」と答えたら、係りのあんちゃんがノートを取り出し住所氏名年齢を記入して金を払えと、態度がきわめて横柄。 小屋の前のテント指定地までくるとトイレの消毒薬のニオイくさくて泊まる気になれないので、泊まるのをやめて西農鳥目指して登りだした。 後ろから誰かが「ダメです、先へ行ってはダメ、引き返さない！」とわめいていた。

1時間ほど登って西農岳3026mに着いたら、頂上は広くて良いテント場があったが、まだ日は高かったので岩稜地帯をすこし上下して農鳥岳3026mとの鞍部の縦走路わき3000mにテントを張った。 稜線すぐ下に雪田残っており水作ること可能だったが、手持ち1Lの水と、チーズ、パン、ココアで夕食をとる。 わずか下弦の欠けた月が明るく空間を照らし、天空のテント内は月の光で明るい。 道元の「山の端のほのめく宵の月影に光も薄く飛ぶ螢かな」が胸に浮かぶ。

7月31日 晴れ

朝5時半テントの横を6人が通る。 昨夜農鳥小屋前テント指定地で寝た神奈川県の高校生4人とつきそい教師2人のパーティだった。 すぐ起きて彼等の後を追う。 列の後ろを歩いていた先生と昨今の高校生の山行の話をする。 農鳥岳からも二重山稜ふうの地形をたどって降り、大門沢分岐点に着く。

ここには2月に遭難した人の碑が立っており、鐘が木組みの三角枠にぶらさがってあった。仏壇の鐘のような音がした。

分岐点から大門沢めがけて一気に降る。2時間ばかり山腹を降って大門沢小屋に着く。暑くて死にそうだ。さらに長い長い沢沿いの高まき道を降って昼12時に奈良田に着いた。奈良田の里温泉に入り、バスで下部温泉駅に出て身延線に乗り、甲府駅経由で取手に帰った。

この後の夏山は、

8月10日～15日 小笹、兵頭、山田、澤井ほか山友達6人で剣合宿、本峰を登ったほかは、6峰Cフェースは渋滞で1ピッチのみで引き返す。小笹さんが膝の手術後、20kgのザックを担ぎ剣沢テント場に現れたのにはまことに吃驚した。

8月21～22日 息子の高、孫娘の咲帆、娘のあずみを連れて吉田口から富士山に登った。

9月1日 澤井さん友人の稲垣さんと丹沢小川谷廊下の沢登り、最初のほうの6m滝のハーケン1本抜き取っており、稲垣さん絶妙のバランスでクリヤーできた。あとは暑気払いの水遊びだった。

9月15～16日 10月初め ランタン・ヒマールのナヤカンガ5846mに登りに行く澤井隊(澤井、稲垣夫妻、山本)の富士トレーニング登山に同行。

9月26～27日 一人で谷川岳ヒツゴー沢へ沢登り。二俣よりすこし奥へ入ったあたりの沢筋でテント泊、ウィークデイのせいか誰にも会わず。ヒツゴー沢はまことに快適な沢で、ときどき滝水かぶりながら登ったが、最後の滝を左にすこし捲くところで高捲きしすぎて沢に戻れず、そのまま猛烈なブッシュこぎしてナカゴー尾根上部に出てしまい、尾根経由下山した。

以上

2012 年夏、源治郎尾根登攀を目玉として剣沢をベースに劔岳東面の尾根、雪渓で遊ぶ計画を立てた。残雪期に 2 度計画したが果たせなかった私にとって未踏の岩稜だ。

8 月 11 日。ケーブル、バスと乗り継ぎ、観光客溢れる室堂から雷鳥沢を経て剣沢テントサイトへ。5 人用テントに 9 人入って賑やかに夕食、明日の源治郎尾根へ向けて早めに就寝。

8 月 12 日。04:30 - 起床、朝食準備、前劔の登山路にヘッドランプの明かりが点々、3 時過ぎにテントサイトを出発した連中だ。05:00 「起きよ～」「おはよ」「おー」05:50 向かいのテントから O/K コンビ顔を出す。劔本峰のガスを見て「行けますか?」「これで行けなきゃいつ行くの!!」。O/K コンビは昨日室堂で 20k を託し、御前、大汝、別山経由で予定時間を 3 時間オーバーでテントサイトに到着、ぼっか訓練で少し疲れ気味。

06:00 栄養水 2 L、昼飯、登攀用具をザックに詰めて「いってきまーす」。劔岳山頂はうっすらとガスに覆われているが間もなく全容を顕すだろう。あの頂へ！滝の下で雪渓に降りアイゼン装着、快適に下降を続け源治郎尾根取り付け 07:30 着。取り付けから直ぐ上の大岩で先行パーティが新人？を指導しながら苦闘中。落石を避けて待つ。

08:00 後続パーティも無いので、ザイルワークの練習を兼ね大岩でザイルを出す。私、H さん、荷揚げ、O さんの順で登り小石と草付のルンゼを抜けて木登りのような登行とガレを進む。09:00 先行パーティに追いつく。O さんはクライミングジムのノリで先行パーティの新人のクライミングに声援を送る。確保準備中に新品の ATG を平蔵谷に落としてしまった！3750 円が谷底に消えてしまった！

O,H,私の順で登り灌木帯を抜ける。剣沢のテント場がよく見える。暑い！思い切り水を飲む。念のため、各リッジ、峰下のトラバースでザイルを出す。峰山頂、八峰の素晴らしい展望を楽しんだ。キレットを経て 峰へ。劔岳山頂へのルートが目前に広がる。先行パーティの懸垂の様子を見ながら順番待ち、一時間程で私たちも懸垂開始。下降点で残り少ない水を飲み干す。あと 4 時間半位でテントサイトへ戻り、ビールが飲める。ガマン出来そうだと、この時点では暢気に構えていた。18:40 劔岳山頂到着。水は一滴も残っておらず口の中が粘り着くようだ。山頂でビバークするという若者と挨拶を交わし 19:00 ヘッドランプを出して下山開始。今日入山予定の小笹さんとも電話でコンタクトも出来ず、テント場の仲間との連絡も取れないので O さんに先行して貰うこととした。H さんと私は 22:00 帰幕予定、夕食は遅くなる旨の伝言を頼む。

カニの横ばいから点灯、O さんの灯りが数百メートル先に行く。平蔵のコル 20:00、思った以上に時間がかかる。平蔵の頭付近で時折霧が晴れてテント場の灯りや O さんの灯りと思しきが見える。無事を知らせるべくヘッドランプを大きく振り円を描いたり、点滅させたりした。お腹はペコペコ、のどはカラカラ、呑み込む唾液は出てこない。入山前に読んだ「凍る体」「トムラウシ遭難」の記事が頭をかすめる。脱水症状、低体温症・・・あたりは暗闇に包まれ、ヘッドランプが照らし出す半径数メートルの空間が世界の全て。この明かりで岩稜帯の不明瞭な踏み跡を慎重に探しながら歩くのは神経と時間を消耗させる。時折現れる鎖や道標は道が間違っていないことの証。過去の記憶と違うな - ! おっつ！ここは見覚えがある！この繰り返しが続く。だんだん歩行速度が落ちてゆく。一時間歩くと TS 到着予想時間が一時間遅くなる！！ここはどのあたり？あと何時間位？の繰り返し周期がだんだん短くなる。足取りが重い。目を瞑るとそのまま寝てしまいそうだ。劔山荘への下り分岐を見過ごして劔御前への道に踏み込んでいたのでは無いだろうか？この雪渓（事後の

調べで武蔵谷と判明、下って無くて良かった！)を下れば楽に TS に着くかな？小さな登りに出くわす。時刻は既に午前零時三十分。西風を避けて路肩でビバークとする。

01:00～03:00 ザイル・ザックを下に敷き、ツエルトを被って仮眠。寒さで目覚め歩き始める。3 分ほどで小さな登りを越すと！一服劔！眼下に劔山荘?の灯り。道は間違っていなかった！帰って調べると劔岳山頂からビバーク地点まで約 1600m、これを 5 時間半かけて歩いた事となる。なんと！時速 290m！分速 4.8m！ ミステリアス???

劔山荘で 500ml のペットボトルを 2 本一気飲み。07:00 テント帰着。O さんも昨夜は劔山荘付近でビバークしたとのこと。「ヤッハウ・オイ」のコールに小笹さんが応えてくれた。

持つべきは「水と地図（ルート図）と携行食」

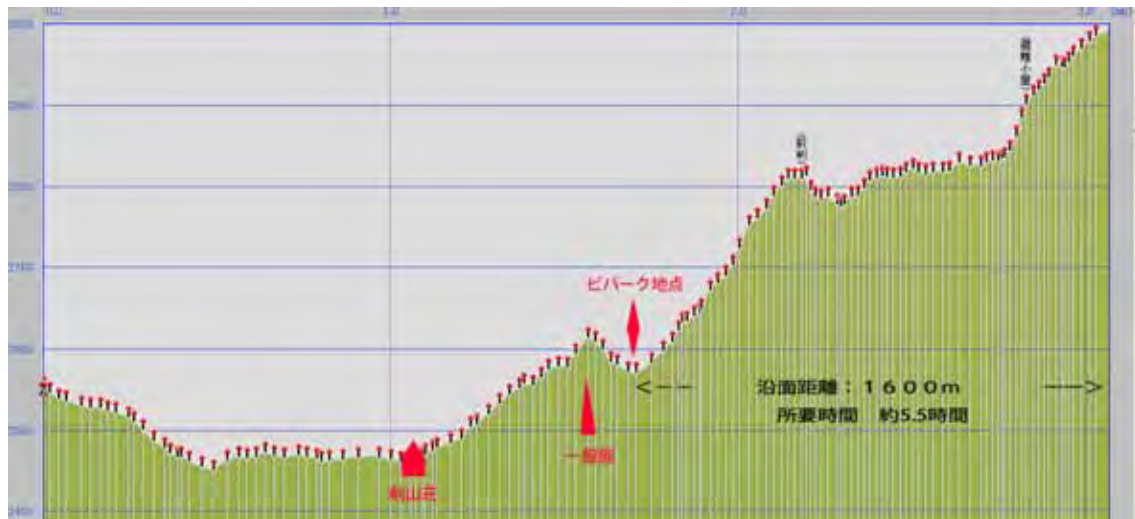


図 1．カシミールで作成した劔沢 - 劔岳頂上ルートの断面図

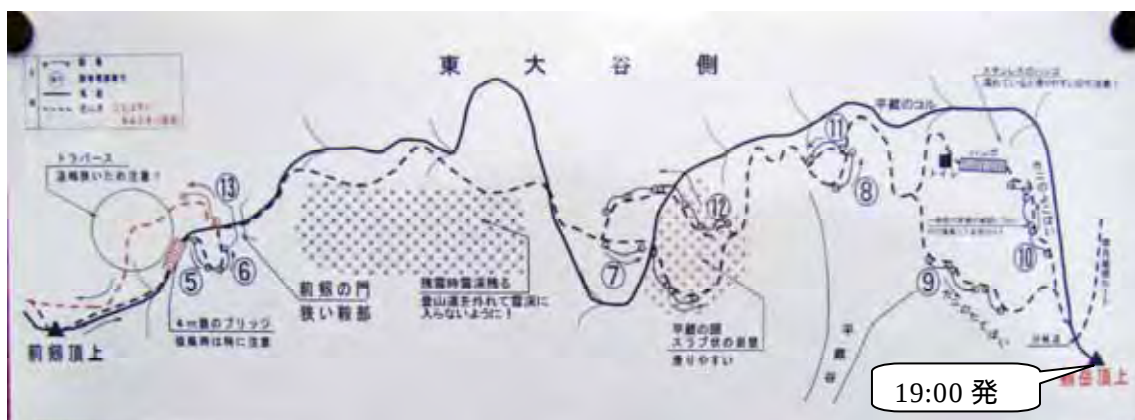


図 2．室堂バスセンターに掲示されている前劔 < > 劔岳頂上ルート図

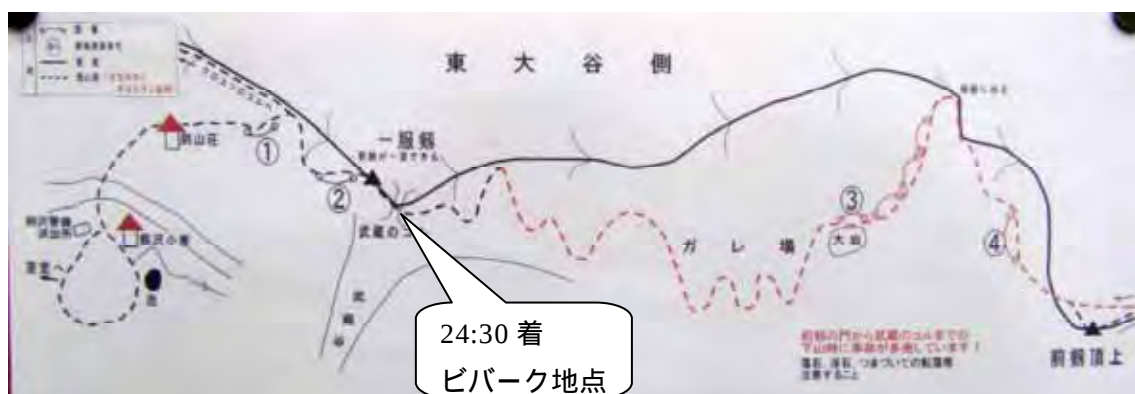


図 3．室堂バスセンターに掲示されている劔沢 TS < > 前劔頂上ルート図

トレールラン

片岡 泰彦

山を駆ける試み

関東の高尾山や丹沢は多くの「山ガール・山ボーイ」が歩いていて、中高年の姿が薄い山域となっている。尤もカラフル原色のタイツをはく中高年もいるので、外見上の区別は難しい。ジョギングや山歩きなどの健康志向ブームの影響で、山をベースとした競技もこれまた意欲ある若者の人気を集めている。「日本山岳耐久レース(通称ハセツネカップ)」や「富士山登山競技」は応募者が多くて中々エントリーできない大会となり、より強い刺激を求めて山へ入る若者も多い。日本海から北、中央、南アルプスを経て8日ほどで太平洋に抜けるレースもあるようだ。旧来の重厚な登山とは違うが山というフィールドに若者が戻っていることは確かであり、ファッションから入る若者がテント泊の縦走を目指す登山者になることもよくあるらしく、山道具が売れている。何だ！大学山岳部の活動と変わらない。

新しい流れを感じる為、山をフィールドとした少々硬派な競技に参加してみました。

乗鞍天空マラソン大会

6月24日(日)6時半、標高1500mの乗鞍高原観光センターに到着。昨夜は日大山岳部OBの小屋に泊めてもらった。冷たく澄んだ空気のなかでランナーがストレッチに勤しんでいる。タイツ姿の若い女性も多い。遥か彼方に聳える乗鞍岳と山肌に光る白い雪。乗鞍スカイラインを走る大会で、マラソン大会と名づけられているが、折り返し地点(大雪渓駐車場)までの18kmは天空めざして只管の登が続き、残り12kmは登った坂を只管駆け下る。折り返し地点は2700mあり、頂上が近く酸素も薄い。

スタートの合図で2000人の集団がトロトロと動き出すが、スタート地点から3kmの休暇村まで結構急な坂道となっている。初参加なので気合の入れ具合が判らないが、とにかく2700mの折り返し地点まで到達しないと、山仲間から何を言われるか分からない。7kmのスキー場とリフトが見える頃になると、体が斜面に慣れ、ペースをつかめるようになってきた。

10km地点の位ヶ原を越えると、スカイラインがジグザグ道となるので、ワンターン先を走っているランナーを見ることが出来る。雄大な景色の中、高原の吹き上げる風が爽やかで、体が浮くよう感じられる。

雪渓の中を通るスカイライン道路の両脇が大きな雪壁となっている。短い区間だが雪の中を縫うように走れるマラソン大会は他にないだろう。とにかく一步一步の歩幅を稼ぐため足を出さないと天空に近づけない。折り返しからのトップランナーが下ってくる。彼らの肩にチカラが入らない柔らかい走りに惚れ惚れする。風を切って落ちるように過ぎ去る。僕は長い坂道ルートを降りるのは初めてなので、なんだか怖くなってきた。高齢者ランナーは少なく、若いランナーが次々とばねをきかせて駆け降りていく。トレールランの人気者「石川弘樹」と女性スタッフが並んでハイタッチしてくれる。

18km地点の折り返しで一回だけの下りへのギアチェンジをすると、足の筋肉がピクピクしたので最初はユックリ降りる。暫くするとギアの組み合わせが滑るようになってきたので、少々スピードが出せるようになってきた。冷風が体を包み込んでくれる。全体にエンジンプレーキのかかる走り方になっているが、慣れない初心者には安全が優先する。30kmのマラソン大会にしては過酷な大会ですが、雪壁を縫うコース、高原の乾いた風と薄い空気。天空に続く青い空。僕にとって新鮮な経験でした。

(記録: 2時間38分 総合70位)

北丹沢12時間山岳耐久レース(通称キタタン)

「北丹沢12時間山岳耐久レース」(通称キタタン)という厳しい名前の大会は、自宅から会場まで1時間半ほどで辿り着ける。初めての山道レースを走るのので、トレランシューズを購入し、7月8日出走することにした。距離はフルマラソンより2kmほど長い44,2kmなので何とか走りきれるだろうと楽観的に考えたが、山のアップダウンは距離の長さだけでは測れない。

スタートは6時30分。6時前に出走ゲートに着いたが強そうなマッジョランナーがもう並んでいて栄養ゼリーでカロリー - 補給している。ハセツネカップと並んで歴史がある古い大会で今年で14回目を迎える。逞しい女性もチラホラ見かける。

号砲が鳴り、ダッシュする人がいた。山道の急坂にさしかかると、さすがに集団が歩き始める。場所によっては、ロープが張ってあったり、梯子、簡単な岩場もある。霧と小雨の鐘撞山を過ぎると所々舗装された林道に出てランニング走行ができた。第2関門への下り道では、林道で抜いた数十人に抜き返された。後半の疲労蓄積が心配なので、無闇なスピードアップはしない。

姫次への道は以前歩いたことがあるが、こんな急でシンドイとは思わなかった。尤も回りの人の息づかいも大きく、それと呼吸を合わせたら楽になった。登り切ったら避難小屋があり、そこからは稜線の快適なコースとなった。

姫次からは走り易い下り道。あと9kmの標示。僕が走り易いということは、トレラン経験者はフルスピードで走れるということだ。速いランナーに次々と抜かれる。

主稜線から外れ青根村に向かう分岐を越すと残り5kmとなる。泥の急坂で立ち止まると足元が揺れ、膝の踏ん張りが利かなくなっている。仮装ランナーにも抜かれた。トレランの下りは体力だけでなく膝の柔軟さと体全体のバランスが必要なようだ。腰が引けた状態で速く下ると、つんのめって前に転倒し事故に繋がる恐れがある。後ろから足音が近づいてくると、立ち止まって道を譲る。僕の丁寧な対応に「有難うございます。すみません。」といいながら軽快に抜いていくが、僕は好きで譲っているわけでない。トレラン初見参の今日は丹沢の自然に敬意を払いユックリ行動しようとするやせ我慢の発露なんだが、トレイルランニングの一日は疲れました。

記録: 6時間25分(255位/総合1366人)

ダウラギリトレッキング報告(2012.10.3～10.26)

佐々木惣四郎・春子、藤村達夫、島川勝、福山昇二

10月3日 11時45分、TG623で関空発。バンコク泊。

10月4日 10時15分、TG319でバンコク発。12時15分、カトマンズ着。

空港でビザ取得。宿はいつものカトマンズ・ゲストハウス(15ドル/1人)。

10月5日 カトマンズ発12:30～13:00ポカラ着。予定より1時間40分遅れのフライト。機内からガウリサンカル、ガネッシュ、マナスルが見えた。ポカラでコック、キッチンボーイ、ポーターと合流し、バスでベニ(カリガンダキ谷の分岐店の大きな町)へ。ベニのロッジに宿泊。

シェルパ2人(テンバ、ダワ)、コック1人(ジッド)、キッチンボーイ3人、ポーター15人(女性3人含)。

10月6日 宿発7時30分～バビチョール～12時30分ダルバン(Darbang 1,110m)。

チャーター車(バス)で出発。バビチョールを過ぎた所で崖崩れのため工事中。高巻きして車(バス)を乗り換えてダルバンへ。学校の校庭(運動場)隅にテント設営。子供達が集まってきてにぎやか。

10月7日 晴れ 気温20 (AM5時30分)

出発7時40分～10時35分ランチポイント(ダラパニ村のはずれ)12時30分～14時35分シバング着(Sibang 1,760m)。

宿泊地からダウラギリ連峰の末端、歩きだしてしばらくでニルギリ連峰の白い山が見えた。谷沿いに歩く。ランチポイントからダウラギリ四峰が正面に見える。今日も学校の校庭がテントサイト。子供達が集まって来てにぎやか。

10月8日 晴れ 気温15 (AM6時)。

出発7時30分～11時05分ミディ着(Mudi 1,720m)。

朝、校長先生が来て寄付を依頼。出発して直ぐの峠でダウラギリ主峰、ダウラギリ連峰が遠望できる。峠から下り橋を渡って緩い登り下り後、平坦な道。今日は半日行動。昼食もテントサイトで。

10月9日 晴れ 気温13 (AM6時)

出発7時40分～11時30分ランチポイント(Naura 1,570m)12時45分～16時5分ボガラ着(Boghara 2,080m)。

朝、テント場に青年達が来てドナーション(寄付)を要求。テント場からダウラギリ主峰が見える。先ず谷底に360m程下る。狭まった谷の崖を削ってつけられた道を歩く(旧道は崖道(岩場)を歩いたらしい)。ボカラでは崖の上に1軒あるバッテリーのテントサイト。夕食前に寄付目的であるが学校の生徒がネパールダンスを踊るので見ないかとの誘いがあり、単なる寄付ねだりではないので見学し、ちょっと多額の寄付をする。しかし、この地域は外国人とみれば寄付要求するらしい。まあ、入山料と思うことにしよう。



10月10日 晴れ後雨 気温 13 (AM6時)

出発 7時15分～10時40分ランチポイント

(Lipsaba(Lipse 手前の水場)、2,000m)12時15分～15時30分ドバン(Dobhan、2,500m)

出発して20分程のキャンプ地で8人程のドイツ人パーティーと出会う。今回のトレッキングで初めて出合ったパーティーで以後、前後して歩く。樹林帯の谷沿いの道を登り下りする。ドバンの1時間手前から雨模様となり、20分程手前で雨具を着ける。ドバンに民家はなく炊事小屋のある広いテントサイト。夕方からみぞれ混じりの雨となる。

10月11日 晴れ 気温 7 (AM6時、テント外 4 (AM7時))

出発 7時40分～12:55 サガレ(3,050m、サガレとチャルターレは同じ場所、Charu bagの手前)

橋を渡って Myagdi khol.a 谷沿いに歩く。枝沢を横切る時に下り登りしながら高度を稼ぐ。炊事小屋のみのテントサイト。これから先に集落はない。

10月12日 晴れ昼過ぎから小雨、夕方からみぞれ(時々激しく降る)、気温 5 (AM6時)外気温 1。

出発 7時40分～10時45分イタリアン・ベースキャンプ(3,550m)

1時間程歩いて左手にダウラギリ四峰が大きく見える。2時間程で谷が開け迫力のある主峰が見える。テントサイトはすばらしいロケーションである。ヘリポートがありダウラギリ登山隊の隊荷を降ろしていた(登山は不成功に終わっただけ)。数隊のトレッカーでテント地はにぎやか。

10月13日 晴れ昼から小雨、みぞれ 気温 0 (AM6時、外気温-3)

今日は高度順応で停滞(休養)。少し丘に登り写真撮影。

10月14日 晴れ夕方から雪 気温-1 (AM6時)

出発 7時40分～フレンチ・ベースキャンプ付近(ランチボックス)～13時20分ジャパン BC(4,080m)

主峰の氷河末端のモレーンの谷を下る。急斜面でガレいて谷底まで35分。緊張する。ここからモレーンの中を歩いてフレンチ BC 付近でランチボックスの昼食。ここからさらにモレーン上のジャパン BC でテントサイト(狭い)。風が強くなってきた。3時過ぎから雪となる。

10月15日 晴れ 気温-4 (AM6時)

出発 7時40分～11時40分ランチポイント(墜落したヘリコプターの残骸あり)12時～13時50分ダウラギリ BC(4,748m)

雪道となったモレーンの中を歩く。2時間でツクチェ(6,848m)のビューポイント。墜落したヘリコプターの残骸がある付近でダウラギリ主峰の北面を見ながらランチボックスの弁当を食べる。ダウラギリ BC のテントサイトは色々あるらしいが一番先のノーマルルートの氷河末端がテントサ



イトとなる。ダウラギリの頂上が見える。女性ポーターが高山病となる。

10月16日 晴れ 気温-9 (AM6時、外気温-13)

出発 7時45分～11時50分ランチボックス 12時～12時30分フレンチパス(5,200m)～14時20分ヒドンバレーのテントサイト(4,900m)

モレーンを過ぎると前面にフレンチ・コルの赤茶けた尾根が見える。振り返るとダウラギリが迫力を持って迫る。イタリアン・ベースキャンプで見た岩壁が小さく見える。イタリア・ベースキャンプからモレーンの中を歩き、開けたフレンチ・パスまでのダウラギリ主峰を巡る道のりすばらしいの一語に尽きる。嘗て同志社大学のダウラギリ遠征にドクターとして参加した山辻さんの往時の苦勞が思い起こされる。フレンチ・コルは強風で休憩せず通過する。雪面をトラバースぎみに下り広大なヒドンバレーと名づけられた所の風当たりが少ないとシェルパのダワさんがいう場所をテントサイトとする。高度の影響で体がだるい。ここからダンプスピークが見える。



ダウラギリ主峰(8,172m)



ダンプスピーク(6,012m)

10月17日 晴れ午後から小雪 気温-10

出発 8時30分～10時15分ダンプス・パス(5,100m or 5,200m)～11時ダンプス BC(4,950m)

広大な雪面をツクチェ、ダウラギリ主峰、振り返ればダンラギリ連峰(～峰)を見ながらいつの間にかダンプス・コルを越え、明日、登頂を計画しているダンプス・ピークのBCへ。高山病の女性ポーターはマルファへと下山した。

10月18日 晴れ 気温-10 (AM2時、5時の気温-20)

出発 2時5分～7時5,550m 地点(下山地点)～8時55分。テント撤収し出発 10時10分～アルバリ(Alu Bari)上部の雪の消えた地点(4,060m)(藤村、島川、佐々木夫人 17時45分着、佐々木、福山 20時着)

カップラーメンを食べ、2時過ぎにダンプス・ピーク(Dhampus Peak、別名 Thapa Peak 6,012m)ダワ・シェルパを先頭に福山、島川、佐々木の4名で出発。新雪 15～30cm、ヘッドランプを着け、主稜線にでる斜面を我々はアイゼンを装着、ダワさんはアイゼンなしで登って行く。寒い。気温は-20、ゆっくりとほとんど休憩せずに歩き 5,550m 付近での休憩時(午前7時前)に福山が突然、全身に震えが起こり続行不能の状態になる(多分、高度の影響、疲労による低体温症かな)。ダワさんがいうには後2時間で登頂できる(実際はもっとかかるだろう)というのだが。島川、佐々木さんには申し訳ないことであるがここで下山となる。

テント場に帰り着き、両手指先に感覚がないのに気付く。特に右手、小指、薬指が無感覚であった(その後、日に日に紫色に変色し、水泡ができる。カトマンズの病院で応急措置、帰国して病院に行き

完治には時間がかかるが切断ということは心配ないとのことであった。

1 時間後、雪上でのキャンプはポーター達にとって辛いとの事で雪の無い地点(ヤクカルカ、約 4,000m)までテントを移動することになる。この道のりが長く、福山は完全にバテてしまい佐々木さんに付き添われ(他 3 人は先行)、暗くなってからはテンバ・シェルパ、ポーターに 1 時間ほど背負われてテント場に着いた。登頂で 8 時間、ヤクカルカまで 10 時間の行動であった。

10 月 19 日 晴れ 気温-5 (AM7 時)

休養。ニルギリ連峰が正面に見える。

10 月 20 日 晴れ 気温-5 (AM6 時)

出発 7 時 50 分 ~ 12 時 マルフア (Marpha、2,670m)

古い石畳の街マルファに向けて下山。ポーター達は飛ぶように下りていった。ニルギリ連峰をみながら数年前に伴さんと歩いたマルファからの道を思い出しながらゆっくりと歩いた。到着してビールで乾杯。

藤村さんは一足先に飛行機でポカラ、カトマンズへと帰るためにジョムソン飛行場へ。

夕食後はポーター達と一緒に打上パーティー。歌と踊りでにぎやかであった。

10 月 21 日 晴れ 気温 5 (AM7 時)

出発 9 時 ~ ガサ(車乗換) ~ 13 時 タトパニ (TATOPANI 温泉)

ここからは先は車での移動。コック、ポーター達とはここからは別行動となり、我々はタトパニの温泉地に宿泊。タンパニ温泉は露天風呂で快適。

10 月 22 日 出発 8 時 ~ 9 時 45 分 ベニ(車乗換) 9 時 50 分 ~ 12 時 05 分 ポカラ

ポカラに着き、夕方、湖畔ティータイムと散策。夜はネパールダンスを見ながら夕食。

10 月 23 日 晴れ

早朝 5 時にサランコットの丘へ車で夜明けのアンナプルナ、マチャプチャレを見に行く。大勢の車と人でいっぱい。朝焼けの山々は美しいが写真に撮るとはっきりしない。朝食後、山岳博物館を見学しカトマンズへ。

10 月 24 日 カトマンズ滞在。25 日カトマンズ発。26 日早朝、帰国(関空)。 (記 福山)

(参考)

航空運賃(関空 ~ カトマンズ往復) 12 万 430 円

トレック費用(ダンプスピーク登山料含、エージェント支払い) 25 万 4,200 円

ビザ代 40 ドル × @80 3,200 円

バンコク宿泊費(1 泊片道) 4,500 円

カトマンズ滞在費(3 泊 15 ドル × 3 = 45 ドル × @80) 3,600 円

ポカラ滞在費(1 泊 20 ドル × @80) 1,600 円

チップ代(シェルパ 2 人、コック 1 人各 100 ドル、キッチン、ポーター、1,500 ~ 2,000 ルピー)

小計 約 4 万円 ÷ 5 = 8,000 円/1 人

合計 39 万 7,700 円(カトマンズ、ポカラでの飲食費は含まない)であった。



ダウラギリ（8172M）周辺トレック雑感（2012年10月）

藤村 達夫

今年の4月、私の高校時代の山仲間が南アルプスで心筋梗塞でなくなりました。お通夜の案内に、享年、古希とありました。同窓生ですから、私も今年中に古希を迎えます。気楽に馬齢を重ねてきた、自分にはショックでした。あー、自分にも後がない、残された時間は短いと。そんな時、佐々木先輩から、アンナプルナトレッキングのお誘いがありました。

仕事も日常の細かい業務から離れつつあり、まさに物見遊山気分、忙中に閑を見つけ、溪山に遊ぶという心境で、即、同行させて頂く事を希望。全く、あなた任せの気楽な意思表示でした。いつの間にかアンナプルナがダウラギリ周辺トレックに変更、あまり、意に介さず準備も特にせず、ええ加減な参加でありました。

古希を直前（12月に満年齢69歳）にして、私の周囲の家庭環境は、義母がかなり深刻な在宅看護要の状態、私の実母は99歳で元気ですが、誰かがそばにいる必要が有りの状況です。若いころの自分の決断だけで決められる海外登山とはおよそ違う状況でのネパール行となりました。

結果として、周りのみんなの理解を得ながらの、結構厳しかった、トレックは私にとって、なにか巡礼のような、またこれまでの人生を振り返る、またとない機会となりました。

これまでお世話になった人々や、家族、友人、また山仲間を思いながら、ここに来れた喜びを感謝しながら一步一步を重ねました。これから残された時間を有効に、豊かに過ごしたいとの思いを強くしながら。

普段、日常の健康維持程度の運動は継続的にしていますが、取り立てて準備をすることなく、身辺装備だけ準備して出発いたしました。私には山に登るという意識はなく、あくまで、HIMALAYA のダウラギリ周辺トレッキングを楽しむのが目的の気楽な出発でした。

まず驚いたのは、今回15名のポーターが同行、かつキッチンBOYが3名、コック1名、シェルパ2名の大部隊であったことです。10年ほど前に浅部さん、上堂さん、私、シェルパで、カラタパールへ出掛けた時はバッティー泊りの小部隊でした。

日本の生活環境と、いまだ、NEPAL 山間部のほとんど以前とあまり変わらない生活ぶり、またポーターの労働の厳しさを目の当たりにして、その落差に驚嘆しました。

ポーターの一日1000ルピーの現金収入は確かに、現地の経済状況では十分に魅力あるものとしても、彼らの過酷な荷役に依存する我々のトレッキング、登山がいつまで続くのか。かかる大名行列に疑念を抱きつつも、亜熱帯地帯を越え、谷間に見え隠れする遠くの雪山が、日に日に目前に迫り、HIMALAYA の高地に足を踏み入れたという実感がわいてきました。

ITALIANABSE CAMP（3700m）まで、暑く、つらい、UP、DOWN を繰り返しながら、高度を上げ、迫りくる、ダウラギリ前衛峰、ツクチェの遠望を楽しみいよいよ核心部に踏み入りました。なんといっても、4748mのダウラギリベースキャンプから、ヒドンバレイ（5140M）ダンパスベースキャンプの3泊の高地でのテント泊りは今回のハイライトであり、酸素の希薄さ

は私にとって、特に睡眠時の酸素摂取の少なさはかなり息苦しく、少なくとも、2吸1呼の繰り返しでした。幸い、頭痛はなく、寒さと夜の頻尿に苦しみました。

ダウラギリベースキャンプは絶好のテント場で、目前にダウラギリ主峰を控え、夜中に岩壁を落下する雪崩の爆音を聞きながら、8000m峰の直下にいる迫力を実感いたしました。

また、主峰を横目にまた、やがて背後に高度を上げ、5300m近いフレンチパスを超えるまでの3 - 4時間のトレックはまじかにするダウラギリの山容の威容、迫力、真っ青な快晴の空にくっきり描かれたスカイライン、私の脳裏に刻まれました。また、あーこれで今回の目的は果たしたなど。

強風の中、フレンチパスを越え、モ-リスエルゾーグ隊長の世界初の8000m峰登頂のフランス隊が発見した、広大なヒドンバレイ(5000M)に足を踏み入れ、右手に、いかにもHIMALAYAの雪山らしい秀麗なツクチェピーク(6920M)を堪能し、満ち足りた気分で大平原を闊歩しました。私には、フレンチパスが最大の山場と意識していました。

あと、ダンパスピークベースキャンプで、最高地幕営。翌日のダンパスピークアタックは辞退し、佐々木、島川、福山、ダウシェルパの出発を朝、2時に満点の星空のもと、見送りました。高度もあり、一番冷え込んだ朝でした。(テント内でマイナス10度)登頂を目指した4名は目的かなわず、5500数十Mの高度で撤退。その日はTEMBA SHERPAの意向もあり、ポーターを出来るだけ、早く、低地に移動させるため、10時にテント撤収、ヤクカルカまで移動になりました。

結果として、この日の行動が一番厳しいものとなり、途中のマイナス10度、強風下でのブリザード、果てしない、トラバース、最後、1000m近い下り。早朝よりの福山、島川、佐々木諸氏の頑張りには、感服しました。

テント地は雪も消え、のどかな、ヤクの放牧地で、真東に深い谷越えに、ニルギリの鋭鋒を望む別天地でした。ここで、長かった、トレックの疲れを癒し、豊かな、休養日を一日楽しみました。最後の幕営地の夜も満点の星空になり、今回の2週間のトレック中、全期間、一部の地域的、極地気象異変を除き、完全な晴れの幸運に恵まれました。

私、個人としては4000Mの高度でのテント地からのご来光は、これが最後と5時50分位にテントを抜け出し、一人、東、ニルギリ主峰(7061M)に向かって、日の出を待ちました。(有名なカリガンダキを挟んで真正面)満点の星空、古希を直前の視力では、残念ながら、それぞれの星はぼやけていましたが、天の川もぼんやり認識でき、やがて明けの明星が一つ残り、はるかニルギリの後方から、一斉に白色に空が変わり行くさまは圧巻でありました。

なんと、意識せず自分の口笛で、第九の第4楽章、歡喜の歌を口ずさんでいたのは驚きでした。そして、その日はマルファまで1400mの長い長い、下りで、無事トレックを終了。私は両足の親指の爪を損傷。素晴らしい、ダウラギリトレッキングでした。

飛行機でポカラに出る為JOMSOMに行き、その夜泊まった500ルピー(500円くらい)の空港前ホテルの、ぼろベッドは毛布二枚で天国の温かみでした。

以上

ダウラギリトレッキング風物誌

島 川 勝

トレッキングの内容については福山さんの詳細な報告があるので私はトレッキングの間に
見た風物について書くことにする。

携帯電話と太陽光発電

断崖絶壁を削るような狭い道に向こうからやってくる女性は熱心に何かに話しかけてい
るようであるが、手には携帯電話を握っていた。石作りの狭い家の前でも夢中で携帯電話
をかけている姿をみた。この山間僻地でもこれだけ普及していることに驚くとともに、使
用するネパール人の収入を考えると、利用料はどうしているのだろうかと思案を心配し
たりする。

トレッキングは、集落のあるところでテントを張って次第に高度を上げてゆく。集落のあ
るところでは、集落の外れの空き地や小学校の校庭がテント地として指定されている。テ
ント地に着くと集落の人がビールやコーラを冷やして売っている。ビール好きの私や佐々
木春子さんにはたまらない誘惑である。ビールの値段は、高度が上がるに従った高くなっ
ていった。これは日本でも同じであるが。

二番目に驚いたのは、これらの集落の家の全てに小さな太陽光発電のパネルが取り付けら
れていたことである。急峻な山地で、勿論電柱もないのであるから太陽光を利用するとい
うのは自然な発想であろう。政府の援助からなのかはしれないが、100戸ほどの集落の粗
末な家にもすべて太陽光パネルが屋根に取り付けられていた。各家庭の燃料は木材と思わ
れるが、その木材伐切と環境保全はどのようにしているのかも気にかかる。というのも、
白塗りの家があった美しいマルファアの集落の近くの山地は、蓬萊峡のような禿山となっ
ており、木材を切りすぎたのでないかと思われたからである。

ドウネーション

トレッキングをしていて人家があるところを進んでいると、子供や大人達からのドウネ
ーションがテントサイトですべてあった。子供達が奉加帳のようなノートを持って追いか
けてくることもあったし、テントを張った小学校では、ちゃんと背広を着こなした先生が同
じくノートを持参して「この学校では、パソコンが少ないのでお願いします。」といかに
先生らしい物言いで請求されると、自発的というよりも半ば強制的な気分になってしてし

まう。勿論、金額も日本円で計算すればたいしたのではないが、多小面食らってしまった。
トレッキング4日目にボガラという断崖に人家が点在する集落に着いたが夕方、この学校の教師であると称する感じのいい青年が2人来て、ドウネーション目的でこの小学生とネパールダンスを踊るといので、テント地のそばの唯一の人家の庭で見ることにした。始まる前に我々やシェルパを庭のいい場所に座らせ、野の草で作った手作りのレイをかけてくれた。

先生も民族衣装（白いたすきがけのような衣装、たしかボカラの山岳博物館で見た00族の衣装）を着ており、小学生も民族衣装で、テープに入れてある音楽に合わせてダンスを軽快に踊ってくれた。夕暮れが迫り、踊る姿が暗闇の中で影絵のように見え、とても幻想的であった。

もちろンドウネーションは弾んだが、受け取る時びつくりしたように喜んでくれ、よかったなと思った。

ダワさん

トレッキングは、我々5名の他、現地スタッフとして、シェルパ、キッチンボーイ、ポーターを含めると21名の大部隊であった。コツクのジッドさんは、日本人の好みをよく知っており、朝食には、おかゆ（「コレ」という。）を作ってくれ、実にお腹に収まりがよかった。また、どんぶりや汁るそば、極め付きは「巻きずし」まで作ってくれた。キッチンボーイも朝のお茶から夕食のデザートまでよく気をつけてくれた。ポーターのうち女性が3人（16 - 18歳）おり、いずれも良く笑いしゃべる娘達だったので、トレッキングが和んだ雰囲気であった。3人のうち1人は途中で高山病のような症状を示して心配したが、実は彼女は結婚していて、どうも妊娠初期の症状であったようであり、同じくポーターの夫とともに先に下山することになった。無事に下山してくれればいいが、まずはめでたいことである。

シェルパは、テンパとテンパの親戚にあたるダワさんであった。テンパは、ランタン追悼50周年で同行したので知っていた。良く気の付くシェルパで、佐々木さんとは10年来の付き合いである。今回は、スペイン製のいいテントとテント地でくつろげるキャンプ用の大きな椅子を用意してくれて、とても快適であった。

ダワさんは、和田さんとヒマラヤを東西に抜けるトレックをしていたが、ダウラギリ隊に参加してくれた。ダワさんは、ダウラギリは16回位来ていて、数回登頂したというべ

テランであり、この地域は知り尽くしているようである。あまり多くを語らないが、その風格は信頼感を抱かせる。

黙々と我らの遅い歩調に合わせて歩いてくれたし、ダンパス登山では、アイゼンもつけず、暗闇の中をリードしてくれ、途中で登頂を断念してからもヤクカルカまでの福山さんの下山をサポートしてくれた。

山にあっては誠に頼りになるシェルパであるが、マルファーで最終日の打ち上げのときには、ポーター達と一緒にネパールダンスを楽しそうに踊っていた姿が目に残っている。

マルファーのりんご

トレッキングも最終を迎え、最後のテント地ヤクカルカでは一日休養した。ヤクカルカのはるか下方のカリガンダキ渓谷にわずかに集落が見えた。そこが歩く最終点のマルファーである。翌日ヤクカルカから約1400メートルをひたすら下降した。歩き出しは連日のトレッキングで右足が痛んだが、薬をつけ我慢してどんどん下降してゆくとマルファーの家が間近に見えてきた。町に入る最後の地点で、ダワさんやテンパと握手して、トレッキングが終わったことを喜びあった。ダワさんから、「あなた達はとても強い人だ」と言われ嬉しかった。マルファーの街は、これまで歩いてきた集落とは違ってとてもセンスがあった。街の建物はいずれも白く塗られていて、道は石畳が敷き詰められており、どこか地中海の街のようであった。山の中腹には、金色に輝くゴンパがあり、朝早く起きて朝日に輝くゴンパの様子はとても美しかった。ここは、明治33年、堺の僧侶河口慧海が教義を求めてチベットに入るために一時滞在したところである（河口慧海「チベット旅行記」白水社）。慧海はマルファーからダウラギリ周辺を越えてトルポからチベットに入っている。散歩していると、街のはずれの方に「河口慧海記念館」という看板があったので入ってみると、まだ建築中であった。誰が建築を企画しているか知らないが、マルファーがとても身近に感じられた。泊った宿は、入り口は薄暗いが、裏は外に開けていて明るかった。裏に木があって小さい果物がたわわになっていた。大きなカゴにその果物が一杯入っていたが、それは小粒のりんごだった。このりんごは日本のりんごのように甘くはなかったが、そのままかじると水分があって、なんともいえないすっきり感があった。マルファーからポカラまでの帰りの凸凹道を車でゆられながらおやつ代わりにこのりんごを何個もかじった。りんごジャムも買って帰ったがこれはとても甘かった。

ナヤカンガ遠征を終えて

山本政之

今を遡ること四十数年前、私が小学五年生の時に住んでいた北九州市にある足立山に登ったことが、私の登山人生の始まりでした。それから歳を重ねアルパインクライミングの魅力を知るに付け、漠然といつかはヒマラヤの山に登りたいと思うようになりました。その夢が現実のものとなったのは、去年の澤井さんからの電話でした。「OCUACのランタンプロジェクトでランタン谷の5～6000m峰に登る予定だが、お前も一緒に行かへんか？」この大阪弁の軽いのりに私は即答出来ませんでした。なぜなら私にはヒマラヤより高いハードルがあったのです。それは92歳の父を自宅で介護しているのです。父を一ヶ月ほど特養に預けなくてはならないのですが、短期間の入所は何時もしていたのですが長期は初めてなので少し不安でした。高齢に加え持病もあるのでやはり病院に入れたいのですが、明らかな病気でないと入院しにくくなっています、これは厚労省の方針なのでしょう。この問題を解決しなければ幻のヒマラヤとなってしまいますとにかく、何時もお世話になっているケアマネージャーの方や、かかりつけの病院のソーシャルワーカーの方に事情を説明して父を受け入れてくれる病院を探してもらう事にしました。暫くすると、受け入れOKの病院が見つかり、ここに私のヒマラヤ遠征、そして初めての海外旅行が動き始めました。まずはパスポートの申請から始め、高度順応のために富士登山が6月、7月、9月の3回、8月は劔岳合宿と澤井さんからヒマラヤ遠征のためのトレーニング計画表が届き、にわかに慌ただしくなってきました。

9月半ばまでは介護しつつトレーニングに参加しなければならないし、私の場合最高到達高度は北岳の3190mなので高度障害に対する不安（他のメンバーは皆海外登山経験者）がありました。6月の富士山行は荒天のため8合目で敗退しましたが、7月と9月は高度障害もなく登頂できたので4000m程度までは何とか登れそうな自信ができました。それに数年前から近くの雷山（955m）を必ず週に一度はトレーニングで登っていること、これも何かの足しになるかもしれないと思うと少し気が楽になりました。

私たちのアタックする山もヤラピークからナヤカンガに変更となりました。詳細な資料もなく、ヤラピークよりも登攀意欲を駆り立てられる山のようなようでした。あわただしく時間が過ぎ、10月1日はあっという間にやって来ました。羽田を深夜発、バンコクで乗り換えてカトマンドゥには翌2日の昼に到着、入国審査、税関を通りやっと空港の外に出ました、乗降客数の割には外に車や人が多く驚きました。荷物をカートに乗せ迎えに来ているシェルパの人たちを探すと、Welcome sawaiのプラカードを発見、一安心して近寄っていくと、近くにいた人達が私たちの荷物を親切？に車に積んでくれたのは良いのですが、その後に「チップ！チップ！」とオネダリの攻撃がきました。日本人は甘いと思われたらいけないので（本当は払いたくなかったのである）澤井さんを指差し「ボス ペイ」（ボスが払う）と初めての海外旅行で初めての英会話を経験したのでした。

甘い澤井さんは後で「10\$も払った！」と悔やんでいました。これがカトマンドウの最初の洗礼でした。以後、異性関係での悩みには慣れている私たちナヤカンガ遠征隊(特に澤井隊長)もこのチップ制には最後まで悩まされ続けました。

車窓から見る市街は混沌と喧騒、都市インフラが不十分なところにモータリゼーションの波が押し寄せてきた結果、排気ガスと砂埃が舞い上がり呼吸器系には優しくない町になっているみたいでした。タメル地区にあるゲストハウスに着きシェルパさんと明日からの予定を確認の後タメル地区をメンバー4人で散策し人の多さにあらためて驚きました。翌朝シェルパとポーターが昨日空港に来た車に乗って来ました、7人乗りインドのタタ製これにドライバーを含め10人が乗り屋根にはたくさんの荷物、楽しいキャラバンの始まりです。シャブルベシに向けてまっしぐらとは行きませんでした。途中悪路で燃料タンクに穴があきタタ自動車あえなく敗退、車は made in japan じゃないといけませんよ。通りかかったピックアップバンに乗せてもらって何とかシャブルベシに到着翌朝からいよいよキャラバン開始、つり橋を何回か渡りながらランタン谷に沿って徐々に高度を稼ぐバンブーにて昼食後今日の宿泊地ラマホテルのロッジ着。翌日はランタン村を目指して行く、徐々に白く輝くランタン、ランタン・リルンの頭が見えてきた、すばらしいの一語である。この景色を見ていると疲れも感じない、もっと歩きたい感じだったがランタン村に到着してしまった。この辺りから体調不調の隊員(稲垣夫人)が出始めた(3500m)。今日はいよいよキャンジン(3800m)である。私にとっては未体験高度に突入だ。ランタン・リルンやガンチェンボ、ナヤカンガを眺めながら歩いていくとキャンジンに着いてしまった。翌日は高度順応でキャンジン・リ(4550m)に登る。別段、高度障害は感じなかったが他のメンバーは“ビス・ダーリ”であった。10/8 本日より B.C(4400m) に向けての本格的な登山になる、いったんランタン谷に下り湿原を越え、日本的な樹林帯を抜け小灌木地帯の急坂を登ると平坦な B.C に着いた。すでにポーター達によってテントが設営され荷物も置かれていた。「内地の冬山より楽じゃん」と思う。食事も作って欲しかったがそれは甘かった。キッチンシェルパは契約してなかったのです。澤井さん曰く「お前がキッチンシェルパだ」「分かりました、インスタントラーメン作ります」久しぶりの和食? 旨かった! 稲垣主人体調すこぶる悪し、明日の HighCamp(5000m)が心配である、澤井隊長もやや不調ぎみ。体調不良者を考えて B.C にテントを一張残していくがシュラフ等が一足先にポーターによって H.C に上げられる事に考えが及ばなかった。このことがナヤカンガにアタック出来なかった一因にもなったと思います。結果 H.C では1張りに4人となり、ただでさえ息苦しい高度なのに、いっそうテントの中は酸欠状態になり高度障害の出ていなかった私も登攀意欲が急激に萎えてしまいました。翌日を停滞にして体調の快復を試みましたがダメで(高度障害は下山以外治らない)ナヤカンガ遠征隊は、この日からカトマンドウ日本食グルメと観光ツアー隊に変身したのでした。

OCUAC の皆様、アイゼン・ピッケルも使わずに帰国した私たちに“大喝!”を・・・。

ヨーロッパ三カ国（ドイツ、オーストリア、スイス）ハイキング旅行

2012 年 9 月 15 日 記

今夏家内とヨーロッパにハイキングに出かけた。7/18 深夜関空出発。ミュンヘン、フッセンを観光して 7/22 ガルミッシュ・パルテンキルヘンという長い名前の町に到着した。ここはかつて冬季オリンピックの開催されたドイツ南部のスキー、登山の基地である。

7/23,24 （ガルミッシュ・パルテンキルヘン）

登山道はオリンピックスタジアムからスタート。Partnach 溪谷に沿って上る。深く急流のゴルジェが続く。ここはちょっとした観光地になっており、家族ずれが散見された。上るに従って人は少なくなり、緑の中を沢に沿って上る。3箇所主要な分岐があるが標識があり問題なし。この道はドイツの最高峰 Zugspitz（2962m）山への一般登山道であり山小屋に 2,3 泊して登頂するようである。Reintal 谷に沿ってしばらく上ると山小屋 Bockhut に到着。さらに進んだが 2,3 の party に会ったのみで静かな歩きが続く。左は高度差 1300 m の Teutelsgrat の北壁である。今夜の宿 Reintallanger Hutte 到着 15:30。山小屋には 50 人ぐらい宿泊者がおり、多くが Zugspitz への登山者のようだ。私たちはドイツ人 party と食事。メニューは肉とマッシュポテト、多くて食べきれない。ビールはジョッキ（500cc）が 3 ユーロと安い。5 人部屋にドイツ人と同宿。就寝 7:45。外はまだ明るい。HB（2 食付）でひとり一泊 48 ユーロ。



翌日も晴れた。起床 6:00 出発 7:20。Zugspitz への登山者が多かったが私たちは来た道を下る。Bockhut まで 1 時間 40 分。ルート KE 4（地図に表示）を取って Kreuzeck に向かったが、途中から流れのない沢になりルートが不明瞭。Kreuzeck は諦め、Partnachalm に向かった。Alm でビールを飲んで休憩。登山口オリンピックスタジアム着 16:00。

このコースは Zugspitz,Alpspite の裏側(南側)の谷に沿って登るから景色を楽しむことはできない。翌日電車、ロープウェイで Zugspitz へ昇り、ドイツを離れた。

7/27,28 (オーバーグルグル)

前日列車とバスでオーストリアのオーバーグルグルへ入った。ここはグルグル谷の最奥、標高 1930m。人口 400 人の町でスキーのリゾート地のような。27 日、朝の外気温は 8 度、暖房が入っている。出発 9:00 グルグル谷の上流に向かって歩くと 1 時間ぐらいで Zirbenwald に到着した。ここに案内図があり、それに従って森の中の緩やかな登り道を進む。Rotmoos の滝を眼下に見て小休止。滝を過ぎて 1 時間で Schonwies Hutte に着く。今日は行程が短いのでのんびり歩く。ここからやや下り、アルプを経てひと登りすると山小屋が見えてきた。今日の宿 Langtalereck Hutte 到着 12:40 と早い。ここは標高 2430m。小屋は増築されており、私たちの個室は新しかった。到着後小屋のテラスでゆっくりし、喉を潤し、雄大な山岳景色を楽しむ。ここはチロルの真ん中。私は Langtal 谷の奥まで 2 時間散策、氷河の舌端近くまで行く。山小屋は H B でひとり一泊 39 ユーロ。



翌日、起床 6:00 気温 9 度。私たちは前日山小屋に早い時刻に到着したが、この先 2 時間のところに Hochwilder Hutte がある。ここは高く景色もいいと思い、計画もしたが翌日の行動を考え Langtalereck 泊まりにした。早朝ひとりで、Hochwilder Hutte 方面に歩き展望のいいところまで行った。途中マーモットの姿を散見する。Klettersteig (Fix ロープのある岩稜登攀ルート) を登っているドイツ人 4 人を見物。おもしろそうである。

山小屋出発 9:10 遅い方であった。Schonwies Hutte 着 10:30. ここから Hoch Mut(2653m)に歩いて登る。ここにはロープウェイの駅があり、日本人ツアー客 6 人と会う。

小雨が降ってきて彼らはロープウェイで食事後下りて行った。私たちは食事して雨が止むのを待つ。ここからは正面の岩峰を見て左に Gaisberg 氷河、右に Rotmoos 氷河を眺望する。すばらしい大パノラマである。雨が止んだのでルート 28 をオーバーグルグルへ下った。ペンション到着 16:00.



7/30,31 (St.Anton)

ここ St.Anton はチロルの文化が色濃く残る山間の町である。標高 1304m。

ペンション出発 8:20. 町の西にあるアールベルクハウスから右に折れ郷土博物館からハイキング開始。Steissbach 谷沿いに小道を 1 時間半登るとゼンヒュッテに到着。スキーゲレンデを登り、ロープウェイの架線の下を越えて再び Steissbach 谷沿いに登る。このコースはよく歩かれている一般道のはずだが意外と標識が少ない。谷は広く、明るくこのあたりはオフピステのスキー場なのだろう。牧草地を過ぎ、広くなだらかな稜線に出て右に 1 時間歩くと今日の宿 Ulmer Hutte がガスの中に見えてきた。ここは標高 2210m。ガスは一時視界 200m ぐらいになったが、その中 12:10 小屋に到着。一度も休憩することなく誰にも会わず歩いた。標高差約 1000m 登った。ここは大スキー場の中の山小屋。部屋はトイレ、シャワー付きの個室。少し昼寝をする。今日はリフトが運休でありわずか 10 人の泊まり客だ。管理人はスペイン系で非常に明るい。ビールに続いて勧められてスナップスを飲む。アルコール度の高いリキュール。ウオッカみたいだ。私たち日本人は珍しいらしく、マガジーンに紹介したいと断って写真を取られた。宿代、H B でひとり 46.9 ユーロ。翌日は晴れ。起床 5:40. 気温 8 度。部屋の窓からは雪渓、氷河の残るチロルの山並みを望む。ヴァルガに登る予定であったが、歩いては険しそう。ロープウェイで登るのが一般的だ。ヴァルガへの道は一般道ではなさそうである。私たちはカペルヘトラバース気味に歩くことにした。Hutte 出発 8:30. 天気は問題なし。小屋から 300m ぐらい登るが、

雪渓の上でありコースが分かりにくい。ロッククライミングをしていた4人 party に会い、カペルへの道を教えてもらう。カペルへのトラバースは一般道であり、眼下に St.Anton の町並み、左上方は岩の尖峰であり、まるで日本の穂高の岩峰のようである。好天の中快適なハイキングを楽しむ。やがてカペルに到着 11:40. ここはスキーのリフトの駅(2250m)で、多くの観光客の姿があった。自転車で旅行中の日本人6人 party に会う。眼下に雄大な緑の景色、南方に雪渓の残る秀峰を見ながら持参のパンで昼食。至福の時である。下りはアントンまで歩く。到着 15:20. 今日は登り 300m、下り 1250mであった。アントンでビール、ワインを買い、アイスクリームを食べながらペンションに向かった。

8/3,4 (Engelberg)

St.Anton から国際列車でスイスの Engelberg に入った。ここは谷の奥に開けた小さなリゾート。標高 1004m。Engelberg では Titlis (3238m) にゴンドラで登り、Ristis、Byunni へ日帰りハイキングの後、Luzern に向けハイキングに出発した。

起床 5:30. 今日はエンゲルベルクを離れる日である。7:40 三井さんと駅で会い、無料バスで Talstation へ。ここから小さいリフトに乗り、Furenalp へ上る。ここは標高 1840m。歩き始めたがガスで視界 200~300m。歩くのは我々3人だけである。道は広い牧場の中にあり、雨も止み視界も段々晴れてきた。200mぐらい下り、500m登ると Surenenpass である。峠で数人のハイカー、自転車隊と会う。眼下に緑の牧場、遠くに雪渓の残る岩山を見ながらランチ。峠からは雪渓の中を歩いたり、登り下りを繰り返し 16:30 に Brusti の宿に到着。ここの宿は Berggasthaus [Z'Graggen]。今日の歩きは 15km、7 時間であった。前半はガスで景色は十分楽しめなかったが高山花は種類も多く楽しめた。

翌日 4 日はいい天気だ。昨夜の泊まり客は 7,8 人と少ない。Haus 前で記念写真。出発 7:40. リフトに乗らないで Altdorf まで 1000m下る。ここ Altdorf はスイス発祥の地、ウィリアム・テルの大きな立像がある。Fluorn までバスで行き、ここから船でルツエルンに向かう。船内でランチ。2 時間あまりのクルージングを楽しむ。湖水はきれいで、取り囲む山々は美しい。ルツエルン駅で三井さんと別れた、彼はエンゲルベルクに帰り、私たちはバスで YH に向かった。YH の部屋は個室でトイレ、シャワー付き。BB でひとりの泊 71.4 スイスフラン。若者の宿泊者が多かったが日本人の姿は全くなかった。

* 三井さん：Engelberg 在住 5 年。前年イタリア、ドロミテで知り合った。

ルツエルンでは 3 泊して、Pilatus 山 (2132m) へ登山電車で昇ったり、市内を観光して 8/8 関西空港着 17:10. 私たち二人の三カ国に及ぶ 18 泊の長いハイキング旅行も無事終了した。

上田 忠士 記

創立九十年抄史発刊その後

山田 裕敏

出来上がってみれば、発行部数200、総費用2百万円程度のプロジェクトでしたが、当会90年の重みと云いますか関係者の層の厚さでしょうか、やはり其れなりの疲れを強いられる取り組みでした。12月に創立記念祝賀会を持ち、その時お約束した発行期日3月末に漕ぎつけるため、「去年の年末は原稿とパソコン睨みの日々でした」と云えば格好が良いのですが、それを毎日やっていた訳ではなく、何となく気分を散らさない為に、「今回は年賀状を出すのは取り止め」と決めあのころは編集活動に集中する振りをしていました。

本誌の編集上の根源的な問題点は勿論多々あることでしょうし、その点でのご批判は覚悟の上でしたが、それにも増して、些細な校正上の見落としで恥ずかしい思いをしている点が多々ありまして、もう取り返しのつかないことに反省しています。

昨年末には池永さん、廣谷さんのご出席の元、来賓の方々を交え90周年を迎えられました。その半年後の6月と8月に早くもご両名とお別れをするなど思いもよらぬことでした。本誌はその間ぎりぎりで行うできたということに、少し運命的なものを感じます。

本誌は一部3,000円(プラス送料)にて頒布しています。然しながら、全部数をこれにて販売できたとしても、到底発行費用は満たされないことは承知していましたので、会員有志からの特別寄付金を戴いた次第です。年齢順に記させてもらいますと、池永さん、廣谷さん、川勝さん、岡野さん、藤村さんからです。この他、先の単価以上の購読料を送金頂いた方々も居られ、財政的には余裕をもって仕事が出来ました。剰余分は会の別途積立金に充当しています。また、製作費用が丸子さんの計らいで、コスト積み上げベースの特価で出来た点も大きな助けでした。社会人山岳団体や大学山岳部に「献呈」したもののなどありますが、まだ60部程の残部があります。少しサボってしまいましたので、年内には今迄先方の記念誌を戴きつつ、まだお返しの出来ていないところを更にチェックすると共に、現役部員確保を念頭に、主として関西地区で山岳部のある高等学校に残部を配布する事にてクリアーしたいと思っています。30部程は手持ちに残します。

序ながら、日本山岳会会報「山」9月号と岳人7月号に本誌の書評が出ましたので、次に再録します。どちらも本誌表紙写真と共に掲載されています。

「山」2012年9月号(No.808)

(松家 晋氏筆)

旧大阪高商・商大を母体とする大阪市立大学山岳会の90年の歩みを綴った抄史である。

その歩みを振り返るとき、通常その基本となる資料は創立から現在までの部会報や日誌類であり、また時にはその活動の背景となった山岳界全体の動向からもヒントを得るであろう。

本会は、まだ商大旅行部といていた昭和の初め、当時結成された「関西学生山岳聯盟」への当初からの加盟校でもあり、その報告書など今は貴重な文献である。これらを体系的に、しかもバランスよく抄史にまとめられた編者の苦勞がしのばれる。

内容は大きく四つの分野から構成されている。まず、主流となっている部分は、会誌『雪線』

の記録からの回顧であり、次に海外登山の変遷と記録、そして逝きし人たちへの追悼、最後に会員やOBからの随筆の四分野からである。

巻頭に『雪線』創刊号の表紙とその目次が見事なカラー印刷で刷り込まれているのが目を引く。

既刊の『雪線』からは、途中12号から22号までは各号の目次ともにその内容の一部が抄録されており、この時代の会の動向を、読み取ることができるというよい。ただ初期の11号（昭和10年8月）までと、昭和41年以降の記録の多くをすべてカットしているのは惜しまれる。とりわけ、会の創立前後の動向や初期の活動記録は、今回整理しておくべきだったと思う。

本会の海外登山は、1960年代から5回行っており、本書ではそのいずれも各報告書から抄録している。

本大学山岳会の海外登山で忘れられないのは、1961年のランタン・リルンへの先駆的な挑戦であったであろう。この時不運にも隊長を含む3名（1名はマナスル登山隊初登頂時のサーダー、ギャアルツエン氏）を雪崩により失うという悲痛な事故が発生している。詳しくは報告書によるが、『山岳』第五十七（1962）年にも、当時の副隊長広谷氏の報告と、3隊員へ寄せられた追悼記事がある。

あれから半世紀を経た今日も、本会のランタン・リルンの氷河に寄せる思いは尽きることがない。本書によると、新たなプロジェクトによるランタン谷の長期の探査をすでに始めているという。

その成果に期待するとともに、本「抄史」が、公式の百年通史への大きな懸け橋となってくれることを願ってやまない。

「岳人」平成24年7月号

会の90年にわたる歩みを1冊にまとめるという企ては、単純に部誌である「雪線」の復刻版を作るのではなく、「雪と岩に象徴される雪線から上」での活躍が主体となる、昭和12年発行の部誌雪線12号以降22号までを主に取り上げることになったという。創部90年といえば、大学山岳部が登山界の一翼を担った聡明期の一画を、会も占めていたということを意味するだろう。昭和4年には、後にこの会のメンバーたちもプレイヤーとして活躍する関西学生山岳聯盟（AAVK）が結成されている。巻頭には、当時の雰囲気伝える「雪線」の創刊号の表紙と目次の色刷写真が収録され、「大正ロマンを色濃く反映」している。

戦前は劔岳の登攀や積雪期の黒部横断、関西学院と合同で隊を出した劔岳北方稜線の記録など、野心的な記録が並ぶ。その一方、台湾や鴨緑江源流踏査についての記述とともに「私の『遠征主義』に対する偽らざる告白」が紹介され、活動についての論議があったことがうかがえる。

戦後は、笠が岳での踏査のほか、海外遠征にも取り組み、三次にわたるランタン・リルンへのトライのほか、複数の海外の記録が再録される。後半では故人への追悼文と「登山と人生」の章に、メンバーたちのエッセーを収める。

400ページを超える分量に、積み重ねた歴史と活動への思いが伝わってくる。現役学生の子がわからないのは残念だが、現在も、ランタン谷での調査に取り組んでいるという。その結果がたのしみだ。

トレールラン (2012 年夏)



天空あそこまで



天空山と雪壁



天空折り返し直後



天空雪壁

ヨーロッパ三カ国ハイキング (2012 年 7 月 ~ 8 月)



ヨーロッパ (2012 年 7 月 28 日)



ヨーロッパ (2012 年 8 月 1 日)



ナヤカンガ ベースキャンプにて 2012 年 10 月

編集後記

42年ぶりのヒマラヤでした。とても惨めな結果に終わり情けなさでいっぱいでした。

4400mのベースキャンプ以上ではまったく自分で無いような状態で5000mのハイキャンプではテント内で酸欠・頭痛・モーレツな下痢と一分でも早く下に下りたい気分でした。ヒマラヤは自分の中でもう一度総括が必要と思っています。それでも素晴らしいランタンリルの勇姿に触れようやく市大山岳会員として資格ができたような気がします。

55号がようやくできました。今回は特に兵頭さんの協力がとてもありがたく感謝申し上げます。自分流が発揮できていませんが能力のなさをつくづく感じる次第です。

澤井 弘忠